

# 第3回 あおもり立志挑戦塾

平成24年7月28日(土)~29日(日) 於:青森市国際交流ハウス

## □天明塾長挨拶「パラダイムシフト」

今日は「パラダイムシフト」ということを考えてみたいと思います。パラダイムという言葉は、考え方の枠組みという意味合いで使っていますが、このパラダイムは人類の歴史とともに変わってきました。

昔は「自然パラダイム」といって自然がその考え方の枠組みの中心だったんです。自然イコール神というわけではないけれども、日本は八百万の神と言って山にも海にも神が宿っていると考えられていました。私達の行動は自然に順応していたんですね。

ところが科学が発達して産業革命を経て「機械論パラダイム」に変わりました。科学を使って産業革命を起こし、自然を都合のいいように変えてきたんです。その行動原理は経済合理性です。いかに便利で早くて儲かるかということですね。ところがこの経済合理性という原理に則った人間中心の生活が、今色々なところに歪みとひずみをもたらしています。地球環境問題、人口爆発、原因不明な病気の蔓延、貧富の格差増大とか聞いたことがありますね？ こういう問題がここにきて出てきたのは、人間中心の経済合理性の考え方、つまり機械論パラダイムが間違っていたのではないかということですね。



それでは21世紀はどういうパラダイムに転換していけばいいのか。色々な学者や研究者が議論していますが、その一つがこれからは「生命論パラダイム」が大事だとなっているんですね。人間が中心ではなく命が中心であるという考え方です。人間も多くの生き物の中のたった1つの種で、特別な存在ではなく多くの生き物の中で生かされているという考え方なんです。

国連の持続可能な開発会議、リオ会議というのがあり

ました。その時にウルグアイのムヒカ大統領が行った会議スピーチは、私達が生きている世界とその問題を上手く言い表しています。今これが話題になっていますので要約して紹介します。

「会場にお越しの政府や代表の皆様。はじめに質問をさせて下さい。ドイツ人が1世帯で持つ車と同数の車をインド人が持てばこの惑星はどうなるでしょうか？ 息をするための酸素がどの位残るでしょうか？ 同じ質問を別の言い方で言うと、西洋の裕福な社会が持つ傲慢な消費を世界の70~80億の人ができるほどの原料がこの地球にあるのでしょうか？ そんなことは可能でしょうか？

なぜ私達はこのような社会を作ってしまったのですか？ マーケットエコノミーの子供、資本主義の子供、すなわち私達が間違いなくこの無限の消費と発展を求めた社会を作ってきたのです。マーケット経済がマーケット社会をつくり、グローバリゼーションが世界のあちこちで原料を探し求める社会にしたのではないのでしょうか？ 私達がグローバリゼーションをコントロールしているのでしょうか？ あるいはグローバリゼーションが私達をコントロールしているのでしょうか？

このようなことを言うのはこの会議の重要性を非難するためのものではありません。その逆なんです。我々の前にある危機問題は環境危機ではありません。政治的な危機なんです。現在は、人類が作ったこの大きな勢力をコントロールしていません。逆に人類がこの消費社会にコントロールされているのです。

私達は発展するために生まれてきたわけではありません。幸せになるためにこの地球に生まれてきたのです。人生は短いし、すぐ目の前を通り過ぎてしまいます。命より高価なものは存在しません。

このハイパー消費を続けるためには、商品の寿命を縮めてできるだけ多くの商品を売らなければなりません。ということは、10万時間もちつ電球を作る能力があるのに、100時間しかもちない電球しか売ってはいけな社会ということです。そんなに長くもちつ電球はマーケットに用はないので売ってはいけません。人がもっと働くため、もっと売るために使い捨てる社会を続けなければいけないのです。悪循環の中にいるのをお気づきでしょうか？

これは紛れもなく政治問題です。石器時代に戻れとは言っているわけではありません。マーケットをコントロールしなければならぬと言いたいのです。これは環境問題ではなく政治問題です。根本的な問題は私達が実行している社会モデルなんです。そして改めて見直さなければならぬのは、私達の生活スタイルなんです。」

どうでしょうか？ もう21世紀に入って既に12年経っています。でもまだ機械論パラダイムを引きずっています。何としても生命論パラダイムに換えていかなくてはならない。その担い手は、今生きている若者、青年達だと思います。今日はパラダイムシフトをキーワードに考えてみました。

## □講話

講師 鬼丸 昌也 氏 (NPO 法人テラ・ルネッサンス理事・創設者)  
題名 志とは何から生まれるのか。



NPO 法人テラ・ルネッサンスで理事をしております鬼丸昌也と申します。私は福岡県生まれで、大学4年、21歳の時に京都にこのNPO法人を立ち上げて今年で12年目になります。テラとはラテン語で地球を意味します。

テラ・ルネッサンスでは5つの事業を手がけています。

1つ目はカンボジアやラオスの地雷の問題です。地雷除去の支援や地雷が埋まっている地域を開発し、貧しさから脱却するための支援をしています。

2つ目は小型武器の問題です。小型武器によって年間50万人が亡くなっています。分かりやすく言うと1分に1人の割合です。実は武器の売買を規制し監視する条約がまだ世界にはありません。そこで国会議員の方に働きかけたり、国連で武器の取引を規制する条約を作るための会議を開催したりしています。

3つ目は子供兵の問題です。小型武器を手にとりて戦っている18歳未満の子供達が世界に25万位いると言われています。私達はアフリカのウガンダ、コンゴ民主共和国の2つの国で、そうした元子供兵、つまり子供時代に兵士だった人達の職業訓練とか識字教育、文字の読み書きとか、社会に復帰するためのお手伝いをしています。

4つ目は東日本大震災で被災した岩手県大槌町の復興支援です。町長さんが津波で亡くなられたその町で、被災された方を対象に簡単な手仕事を提供したり賃金をお支払いする仕事をしています。

最後がこうした講演活動です。年に120回位、学校や企業でこのような講演をしています。

僕が生まれたのは福岡県の旧小石原村で焼き物で有名なところなんです。ものすごく田舎で、高校へは毎朝5時半に起きて隣の大分県の日田というところへ通っていました。そんな田舎の高校生が初めて海外にスタディツアーで行ったんですね。スリランカという国です。初めての

海外旅行で興奮しました。でも行って感じたのは戦争のリアリティーでした。スリランカは7年前まで南北で戦争をしていました。そこでアジアで最大のNGO「サルボダヤ」を作ったアリアヤトネ博士にお会いしました。サルボダヤとは現地のシンハラ語で「全ての人の目覚め」という意味です。仏教の考え方に基づいて地域おこしをしている団体です。

僕ら先進国のNGOとか国際機関はよくこんな失敗をするんです。「あなたの村の課題、この技術を使ったら解決するよ。このお金を使ったら解決するよ。この考え方を使ったら解決するよ。このフレームワークを使ったら解決するよ」って。全て外から解決策を持って行くんですね。もちろん東日本大震災のような大災害の直後や大きな紛争があった直後の段階では、外からの力、お金、知恵が必要です。でも自分達が心底変わりたい、自分が愛する会社や愛する地域を本気で変えたいって思わない限り、外からどんな有名なコンサルタントが来ても変わらないんですね。それは借り物なんです。借り物には力はありません。内発的な気付きが必要なんです。

だから僕たちは困っているところから要請があれば、まず全員を集めて会合を持ちそこで司会をします。そして自分達の地域の問題を話し合ってもらいます。皆で課題を可視化するんです。一人が問題だと思っていることは悩みや妄想にしか過ぎません。でも他者と共有すれば悩みは社会的な課題に生まれ変わります。

スリランカには当時およそ1万2千の村がありましたが、約8千の村がこの方式を導入して、自分達の村を自分達の手で変えていこうとしていました。そんな活動を始めたアリアヤトネ博士にこんなふうに言われました。

「君が何かをしよう、何かを変えようとした時、特別な知識や体験、特別な何かというのは必要ないんだ。ただ次のことだけ覚えておいてほしい。それはどんな人であっても、子供、お年寄り、男性、女性、どんな人であっても、自分と自分の所属する組織、自分の住んでいる地域の未来を創る力があるんだ、能力があるんだということ。そして全員にその力があることを信じなさい。そうすればたとえ親切な人に裏切られても、大切なことがうまくいかなくなっても、全員にその力があることさえ信じていれば、君は何でもすることができる。何でも変えることができるよ」とおっしゃっていただきました。その時から僕のこのような人生がスタートしたんです。

まずカンボジアの問題に取り組みました。この写真に写っている家は地雷原の中に建っています。この家に住んでいる人達は、自分達が地雷原の中に住んでいることを知っています。他に移ればいいじゃないかと思えます

がそれができないんです。ここで生活し田畑を耕し現金収入を得なければ、その日の糧を得ることができないんですね。ちなみに地雷原という言葉ですが、この会場位の広さに何個以上地雷があれば地雷原と呼ばれるようになると思いますか？ 10個？ 20個？ 実は答えは0個なんです。地雷原は地雷が埋まっている場所とは限りません。そこに住んでいる人がここに地雷があると信じ込んでいる場所なんです。つまり地雷は、そこに地雷があると思わせるだけで人の自由を奪ってしまう、そんな兵器です。一説によると、世界中の地雷を全て取り除くのにあと千二百年かかると言われています。



僕はとてもショックでした。この状況を何とか変えたいと思いました。でも何もすることができなかつたんです。地雷除去のために特別な技術を習得しているわけでもないし、除去費用に多額の寄付が出来るほどお金持ちでもない。さらにショックだったのはキリングフィールドを訪れた時です。ここに殺害された方々の顔写真が展示されています。子供の写真もあります。全員無表情です。兵士が銃剣を空に向けているその先に赤ん坊を放り投けている写真もあります。

僕はなんでこんなことが起こるんだ、何で人はこんな悪魔みたいになれるんだと思いました。子供を殺そうとした兵士は同じ人間で、家に帰れば家族がいて愛する人がいるはず。そういう気持ちを持ちながら、次の瞬間には同じ人間をまるでモノのように消すことができる。そんな力が人間の中にあるんだと思いました。その力はカンボジアのこの時代の人達だから持ち得たんでしょうか？ いや違う。僕は今の時代も、全ての人の心の中にあるんじゃないか思います。日本で起きている色々な事件もそうです。子供の虐待死の問題もそうです。どうして周りの人間は気付かなかつたんでしょうか？ でも僕はその周りの人達を非難する資格はありません。僕だって自分の家の隣に住んでいる人がどういう人か分かつたとしても知らないし知ろうともしない。その時僕は気付いたんですね。あっそうか。僕の中にもカンボジアの兵士と同じように、大切にしていた人を次の瞬間にはまるでモノのように消すことができる。そんな力が僕の中にもあるんだと。

僕はそんな力がある限り、社会なんて変わらないと思いました。だから僕は諦めようと思ったんです。だってたった1人で何かやろうと決めても、そんな力が自分の中にも、社会全体の中にもあるのなら何も変わらないじゃないかって。その時にある言葉が浮かんだんです。

“Change is possible. Anything is possible. We should always strive to make the best of what we have”

「変わらないものなんてない。何だって可能だ。僕達はいつだって自分にできる限りのことを、自分にやれる限りのことを精一杯やればいいんだ。」

この言葉は、長野オリンピックで聖火ランナーを務めたクリス・ムーンさんの言葉です。彼は地雷除去団体に働いていましたが作業中の事故で右手足を失いました。彼は1つのことに気付いたんです。地雷で手足を失った自分だからこそ、地雷を無くすために、地雷被害の悲惨さを訴えるために何かできるんじゃないかと。彼にできることは走ることでした。地雷の悲惨さを伝えることでした。それで義足をはめて走り続けたんですね。

じゃあ、技術もお金もない自分には何が出来るんだろうと考えました。するとこの僕にもできることがあったんです。それはこのような形で皆さんに「伝える」ということだったんですね。

実はこんな話をしても、心の半分にこういう気持ちがあります。こんなこと続けていても一体何が変わるんだろうって？ その時僕はこう思うようにしています。私達の目の前に2つの未来があります。1つは子供達が安心して学校に通い、友達と遊び、家族と一緒に御飯を食べることができる未来。もう1つは子供達が地雷を踏んで、痛さや孤独さ、苦しさを感じ、泣きじゃくりながら消えていく未来。先ほどの写真の無表情の子供達がいる世界です。この2つの未来のどちらかを選ぶのは誰でしょうか？ 子供達でしょうか？ 違います。それは今ここに生きている僕自身なんです。あなた自身なんです。今皆さん一人ひとりの心の中で、未来の子供達は笑っていますか？ それとも泣いていますか？

地雷の後に、ウガンダの子供兵の問題に取り組みました。当時ウガンダ北部は戦争状態で、神の抵抗軍という反乱軍が24年間で6万5千人の子供達を誘拐して兵士にしていたんですね。僕たちはウガンダで8人の元子供兵士に会いました。1人だけ御紹介するとこの子は12歳の時に神の抵抗軍に誘拐されました。誘拐された後、軍隊で訓練を受け自分の生まれ育った村を襲撃に行かされます。理由は簡単で脱走を防ぐためです。自分の村で残虐な行為をさせられてこの子はこう思うんです。もうこの村には帰れない。お父さんもお母さんも家族も親戚も僕がやったことを知っている。だから僕はこの村には帰れない。彼は大人に認めてほしいんです。どんなに年を取っても人は誰かに認められたい、受け入れられたい、褒められたいという承認欲求があります。そこで僕たちは元子供兵の社会復帰プログラムを行いました。6年間で

149名の社会復帰を手助けしました。僕は社会が人にやってはいけない最たるものは絶望を感じさせることだと思っています。元子供兵に「もう僕には何もできない」と思わせてしまったら駄目なんです。だから稼いでもらうことにしました。商売は人に信頼されなければ成り立ちません。この子供兵達が地域社会に戻れば、被害者ではなくて加害者と見られます。だから地域に溶け込むのは大変なんです。でもこの子供達が村に必要なものを売り始めると、そこにコミュニケーションが生まれます。和解の促進に繋がるんです。そこから住民との対話が生まれ、地域社会に溶け込んでいくんです。

子供兵が増えた理由は、子供が素直で、武器が小さく軽くなって子供でも扱うことができるようになったためです。でも実は、僕らの生活と子供兵が増えることには関係があるんです。この20年間の地域紛争を調べるとほぼ3つの地域で紛争が起きています。1つはガスや石油といったエネルギー資源が出てくる国。もう1つはエネルギー資源を港まで運ぶパイプラインが通っている国。最後がレアメタルなどの貴重な資源、例えば貴金属を産出する国です。

携帯電話やゲーム機、電気自動車などの電池にはレアメタルが含まれています。そうするとその資源を巡って紛争が起きるんです。需要があれば色んな利権や取引が絡んできます。では日本では誰が使っているんでしょうか？ それを考えたとき僕はショックを受けました。僕は、一方で子供兵の社会復帰の支援をしながら、もう一方で紛争を誘発する原因を作っていたんです。このことは僕にとって、誰のために、何のためにやるのかを改めて考えさせるいい機会でした。そしてこう思ったんです。僕の中に、そして社会の中に子供兵を増やすようなライフスタイルがあるなら、少しずつでもそれを変えていけばいい。過去に戻ることはできませんが、これから起こることは変えられます。そこで少しずつ子供兵の問題を世の中に伝えていこうと決めたんです。私

達は微力でもそういう活動を続けています。皆さん、微力は、無力と違います。たとえ微力であっても、世界を変えていく力があるからなんです。

例えばイギリスでは、若者達が新聞広告にダイヤモンドから血の滴る写真を載せてこう訴えたんです。「あなたは愛する人に血塗られたダイヤを贈りますか?」。そうするとダイヤを買う人は宝石商に聞くようになります。「このダイヤどこで採れたの?」と。今日では不完全ではありますが、キンバリープロセスつまりダイヤの生産地を証明しなければいけない仕組みができました。

日本の携帯電話会社もそうです。現在日本のメーカーはコンゴ産を使っていません。福島県のある母親がメーカーにこういう葉書を送りました。「私は母親です。子供兵ということにショックを覚えました。自分の携帯電話が原因になっているなんて考えられません。だからお願いがあるんです。あなたの会社で作っている携帯電話にコンゴで採れた材料を使わないでください」と。批判ではなくて提案したんです。それに企業も真摯に応えました。つまり何が問題であるかを誰かに伝えることで社会が変わったんです。

塾生の皆さんに是非覚えていただきたい言葉があります。ガンジーの言葉です。「良きことは、かたつむりの早さで進む」。僕ら普通は待てないですよ。上司や愛する人が自分のことを理解してくれることを待てない。待てないと諦めちゃうんです。でもそんな時にガンジーは言うんです。「いや、社会は必ず良くなる。社会は少しずつ必ず良くなっていくんだ。だから信じる勇気を持とう。そして何より待つ勇気を持とう」と。

今日お話した世界の捉え方や考え方は、皆さんそれぞれ違うと思いますが、自分だったら何ができるのかを考えていただきたいと思います。そして、20代、30代の皆さんと一緒に、全ての人が安心して生活できる世界を目指していきたいと思います。

## □グループディスカッション

テーマ：「私達だからできること、それは何か?」

(身の回りの問題を解決するために塾生ができることは何かを5グループに分かれて議論。)

チーム名	主な論点
磯野家	“青森県版サザエさん”(青森県に住んで人口を増やす取組)をつくる取組。
川森田磯野	青森県の強みと弱みを知る。豊かな自然(川、森、田、磯、野)を生かしたライフスタイルの提案。
Escargot	必要以上の防犯意識。人付き合いの希薄化を防ぐ手立て。
25.8	中心商店街の賑わいづくり。人を呼び込む仕掛けづくり。
.75	近所づきあいや親子関係の見直し。

